

今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

上山隆大 著

『アカデミック・キャピタリズムを超えて』 ——アメリカの大学と科学研究の現在』

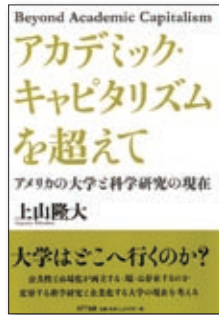
(2010年 NTT出版)

営利目的へと変化する研究活動

2010年のノーベル化学賞は二人の日本人に与えられた。その一人、鈴木章北海道大学名誉教授は受賞後のインタビューで、「クロスカップリング」の方法を発見した時、特許は取らなかったと語っていた。その時特許を取り、自分だけの占有物にしていたら、これだけ多くの人々が活用してくれなかったことだろう、むしろ特許を取らなかったが故に、世界中の人々がこの知識を利用し、新たな商品開発に繋げてくれたと語っていた。おかげでこの技術は新薬、液晶など、さまざまな商品開発に活用され、今では多くの人々が恩恵を受けている。しかしこの話を聞いた時、逆にその時特許を取っておけば、鈴木教授は莫大な資産を作れたことだろうに、残念なことをしたと思った人もいたことだろう。この話が物語るように、大学の研究者は自分の発見した新知識をいち早く学術雑誌に公表し、第一発見者という名誉を確保することを目標に行動してきた。その新発見で特許を取り、対価を払わなければ使えないようにするなどということはまったく考えなかった。研究から生まれる新知識は、人類共通の資産と見なされ、誰でも無償で自由に使えるというルールの上に大学での研究は成り立っていた。それが大学への公費投入を正当化してきた。

特許取得は単純に悪いことか

ところが最近では新しい発見があっても、すぐは公表せず、まずは特許を取り、その特許を特定の営利企業にだけ独占的な使用を認め、そのライセンス料をもとに次の研究資金を準備する事例が増えた。特にその傾向が目立っているのが、アメリカ西部の一部の研究中心大学で、本書はそこで何が起きているかを観察したフィールドワークの記録である。「アカデミック・キャピタリズム」とは、大学があたかも営利企業のように、研究に投資を行い、そこから利益を



得て、それを次の研究活動の資金として活用するような在り方を指している。これを「起業家型大学」という人もいる。

学術雑誌上で広く公表すると、特許申請をするのでは、いったいどういう違いがあるのか。著者はインタビューを通じて、学術雑誌に発表しても、年々生産される多数の学術論文のなかに埋もれてしまい、誰からも注目されず、やがて忘れ去られる危険性が高いという研究

者の心配を聞き出している。これに対し、特許を取れば企業が注目し、その産業利用を工夫し、社会的に普及する機会が増すという。誰もせっかくの研究成果が死滅してゆくのを坐して見ていることには耐えられない。著者はこうした事実をもとに、特許取得のプラス面を強調している。そして研究の商業化、産業化を単純に悪とみなす古典的なアカデミズムを見直すべきだと主張している。

資金問題が研究の将来性を左右

つまるところ、知識を公共財としてではなく、私有財と見る新たな知識観が生まれつつある。問題はどのようにしてこのような変化が発生したのかである。今や国家、政府は莫大な投資を要する研究を支援しきれなくなった。研究活動を続けてゆくには、大学自らが資金を稼ぎ出さなければならなくなった。科学・学問・芸術などの活動には、これまでパトロンがいて、陰からそれを支えていた。しかしそのパトロンが消滅した以上、大学自身が自ら作りだした新知識、技術に特許権を設定し、私有物として占有し、それを使って資金の回収を図るとともに、次の研究資金の準備をする必要が生まれた。

ただしかし、それで知識は自由に流れるのだろうか。アイデアのダイナミックな交流は進むのだろうか。かえって進歩を妨害することにならないだろうか。このように本書は、将来に向けて考えなければならない重要なポイントを多数示唆している。